どうやら転生してしまったようです。

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうやら転生してしまったようです。

【Ｎコード】
Ｎ８９１２Ｒ

【作者名】
亀

【あらすじ】
何の前触れも無く誰かさんの姉になってしまいました。ひのたまもとんでこなかったし、めのまえにブラックホールとかも現れなかったし、で、なんで、私が転生されたのでしょう。このＯＮＥ　ＰＩＣＥに！！！
更新が不定期ですがご了承ください。

転生

ｓｉｄｅ主人公

「おぎゃーーーーーーーーーーっ！！！！！」

わたしはこの世に・・・いや、異世界だから違うか・・・まあそんな感じで二度めの生を受けたのだった。そう二度目の。なぜそうなったかは数時間前にさかのぼる・・・

わたしはいつもと変わらずに家を出て、そしていつもと変わらないように自転車で登校していた。

別にわたしは子猫を助けようとも、何か特別なことも起こっていなかった。いたって普通に学校に着き、自転車置き場に自転車を置いて校門をくぐり抜けた。そのときまばゆい光も、火の玉が飛んできたりとか（親友が火の玉がとんできて異世界トリップした）していなかった。なにもなく初めに戻る。

「元気な声で鳴くわい。」

え？な、なんですかこの状況！！！！！

「おぎゃーーーーーーーーー（異世界トリップしたの！？」

わたしはそう叫んだつもりだった。
でも、おぎゃあとしかいえない。どうやら赤ちゃんになってしまったようだ。
わたしを抱いているのはなぜかお母さんのにおいがするので、お母さんだろう。そしてわたしを覗き込んでいるｏｎｅ　ｐｉｃｅの世界で出てくるガープ中将のような、そんなおじいちゃんが覗き込んでいる。
ん？ｏｎｅ　ｐｉｃｅ？あ、そこに転送したんだ。え？そんな・・・・・・。

わたしは意識を飛ばした。だってもう、なんか、非現実過ぎてわかんなくなっちゃったもん。

次に起きたときからもう元の世界のことは考えなくて、この世界で

生きることにしました。唯一の救いはアッチよりもこっちの方が断然良いこと！！もともと孤児だったわたしは、当然父母、父祖母ともにいなかったのです。それにいじめられてた。「やーい捨て子」ってね。それにコッチでは親は世界的大犯罪者だけどいるし、お爺ちゃんは海軍のお偉いさん。おばあちゃんはいないと思うけどね。まあとにかく肉親はいる。そして村の人たちも皆優しいし、こどもたちがちょっと少ないのは難点だけど、でもいいところ。な～んて思いながら過ごしていたらちょうど一歳になりました。家族構成は以下のとうり

御爺ちゃん・・・モンキー・Ｄ・ガープ
御婆ちゃん・・・他界
お父さん・・・・モンキー・Ｄ・ドラゴン
お母さん・・・・不明

です。そしてわたしは「モンキー・Ｄ・スノウ」ここまでくるともう分かりますか？はい。ｏｎｅ　ｐｉｃｅの主人公の姉です。髪は黒。目も黒。肌は真っ白。顔は整っている方だと思います。そして現在誕生日をいわってもらっています。

「わしからのプレゼントじゃ。」

といっても、爺ちゃんだけしかいないけど。他の人たちは忙しくってもういない。だってさ、昨日からしてるんだよ！？これ！昨日は町中の人たちが祝ってくれたけど、何で二日もするのは不思議だわ。

「船に乗れ。」

そういって私を米俵でも担ぐように肩に担いで爺ちゃんともども船にのりました。そしてなぜか皆がかわいそうな目で見送る。このみ

んなの反応を見て。私はどんなことが起こるかわくわくしていた。
現実を見るまでは。

「ほら、がんばっといで。一年経ったら見に来るからな。」

そういって。私を無人島へおいていった。困惑していた。何で置いていくのか分からなかった。
爺ちゃんの影がなくなるまで放心状態だった私は、はっと気を取り直した。
え？がんばっといで？

「ここで、一年間も、暮らせと？」

そういうことになります。はい。
だってね？「がんばっといで、一年経ったら見に来るからな」ですよ？つまり、一年経たないと迎えに来ないぞ。と言うことに変換できるわけなのです。
絶対生まれ変わるとこ間違えたわ。このときではっきりと確信した。

死亡フラグは腹いっぱいだ

まあ、あの爺ちゃんのことだ。絶対帰ってくる確率は無い。なので、まず森？に入って行きました。

ガルルル
チュンチュン
シャーッ
ブチャッ　　バキボキ
ミシミシ
グオオオオオオオ

いかにも猛獣達がいそうです。粋がいいのばっかりだね。うん。
さてさて、猛獣なんて一歳児が狩れるわけも無いじゃないですか。
だから果物でしのぎます。
まずそこらへんを散策してみる。
さっそく果物はっけーん！！
見た目はメロンっぽい。マスクメロン。いろもそう。よし。そのまま食べてみる。

パクッ

うわ。まじい。でも食べれないことは無いので、涙をこらえつつ食べる。
・・・・・よし完食！口直しにおいしそうな果物を食べてみる。

パクッ

おお！！いける。おいしい。見た目はみかんのようなもので、色は

黄色だったが味はモモだ。うん。不思議ー。そして、もう二、三個とってみて適当な木の上に上ってみた。鳥の卵はっけーん。捕ろう。ささっと2、3個とって下に下りる。

ギャーッ

親鳥に見つかった。やべっ。上を見てみると、カモメがいた。ものすごくでかそうな。
絶対にこいつは捕食する側だぞ。本能がそう次げている。とにかく逃げるべし、逃げるべし、逃げるべし！！！っとお、ふう。うまいことまけたかな？

ビギャーゴギャギャギャギャギャーターベルターベルーテキターベルー

おいおいおい！！！なんなんだこの島アアアア！！！！最後の方！！「食べる食べる敵食べる」に聞こえたんだが気のせいか！？とにかくこのまま過ごす。むやみに動いてつかまったんじゃ話しにならん！！

テキドコダーーーーー

何で喋ってんの！！！！もう喋っている領域だよね。このカモメもどき。こんな知能高かったらすぐにみつか・・・・

ドサリ

ちゃ、着地した。私の木のそばに。見つかる～見つかるよ～。何で真横に着地するんだよ！！！
カモメもどき、以外にでかいぞ。私の身長はせいぜい５４ｃｍぐらい。一メートルくらいに考えると私５人分くらいあるよ・・・・。

うん。わたし。非常にやばい状況だよね！！？？・・・・。誰かこいつ狩って！！！！私無理ー！！こんな知能高そうで運動できそうな奴と戦う気はさらさらないよ。むしろ願い下げだ！！！！いいいいいいいいいいいいいいやあああああああああああああああああ！！！！

グルルルルル

えっつ？鳥の次は・・・？私は隣を見る。あ、もちろん鳥じゃないほうだよ。鳥いて欲しくないけど・・・。そこにはなんと！！！これまたでかい虎もどきが・・・いた。しかもコッチ見てませんか？いやいやいや。私じゃ・・・・無いよね？鳥のほうだよね？そうで合ってくれ！おねがいだ！！もう死亡フラグはいやあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！
もうこうなりゃやけだ。私は今まで隠れていた木の陰から木の頂上へ登っていく。虎もどきが目線で追ってくるのは、気のせいだよね。うん。
よし、頂上まで来たよ。うん。足元とかみたくもない光景が広がってるけどね。うん。なってたって虎がいるんですもの！！とらもどきですけれどもね！！この際どうでもいいよ！！だれか～この一歳児に救いの手を～～～～～～～～～～

何らやチート能力ありそうです

虎もどきさん。もういいですか？私よりはるかに量がありそうで、おいしそーな鳥さんいますよ？あなたの隣に・・・・。

ガリガリガリ

ええ？ガリガリって木でも倒そうとしてるのか、登ろうとしているのしかありえないよね？あ、鳥を食べているときの音とかもあるよね、ビチャッ　ボキボキ　とかいう感じでサ。ん？ガリガリじゃないってか？気にしない気にしない。気にしたら負けだと思う。

グルルルルルルハラヘッターハヤクオリテコイータベタインダー

トリハオレキライダー

聞きたくも無いよ！！！！そんな言葉！！！こいつも知能高いのかよ！！！ホントになんなんだこの島アアアアアア！！！！勘弁してくれ！！！！

モウイイオレガノボル

なんかとらさん言ってますけど！！？？「もういいおれがのぼる」ですって？これはやばい。ひじょーにやばい。

ミイイイイツウウウウウウケエエエエエエエエエエエタアアアアアアアア

やべええ！！今見つけたのはとりさんか？とらさんか？どっちもいやあああああああ。ふと横を見る。

寅さんが笑っていらっしゃる！！もう登っているのかコンチクショー！！身体能力ホントに高かったよ・・・。
とらさんが私に襲いかかるこうなりゃ一か八か眉間にむかって殴る！！！！

ゴツン

いい音したね。私の拳大丈夫？こわれてない？大丈夫？いやいやそんなことよりも寅さんの体に向かって体当たり！！！

ボキィ

大丈夫か？私の体！！！！体壊れてちゃあ元も子もないぞ！！！！
ん？大丈夫？
まず手を確認しよう。ぐーバーぐーバーと手を開いたり閉じたりする良し。動く。ラジオ体操してみても大丈夫。よかったあ。動いた。大丈夫だった。さすがガープ爺ちゃんの孫娘！体は頑丈に作られてんだね。よかった。ん？とらさん？ああ。衝撃かなんかで落ちましたよ？鳥さんは目を見開いて飛んできました。・・・うん。わたしの体一歳児とは思えないほどだよね。はっ！もしかしたら不味いメロンぽいのは悪魔の実シリーズの何かなのか！？いやいやそんなわけ無いだろう。そこら辺の木にむかってパンチ！

ボキィ

上手に折れました～♪
・・・・。ホントに悪魔のみ食べたのかなあ？
よし、まあこれでもし、万が一溺れた場合のいかだができた。んで、それを持って、

「よいしょっと。」

ズウウウウンとか効果音でつきそうなくらいでっかい木が持ち上がりました。両手で抱えているけどまあ持ち上がったというくらいのものですね。よし。海岸まで行ってっと。よし。海にいかだをうかべてハイロー

ぼちゃん

「ごぼごぶぼぼぼぼぼぼお。」

おぼれた。泳ぎ方知らないし。いやいや。ここでいかだが無い！無い？ない？ないのかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！よし。まずバタ足だ。でも力が抜けて・・・もう・・・・だめ・・・

「じにぼくぼい・・・ごぼっ。（死にたくない）」

私はそのまま意識を失った。

黒金げっと！！

ん？・・・・死んでない？私おぼれたよね？溺れたよね？その証拠に服もびしょ濡れ。でも、息してるし・・・

「けほっ・・・ごほ・・・。」

飲んだであろう海水を外へ出し、とりあえず状況を把握する。まず目の前には何も無い。今寝転んでいるところは草の臭いがするからジャングルの中だろう。そして右側には何もいない。左側には・・・・いた。寅さんが。私はあわてて起き上がる。ん？寅さんが助けてくれたの？若干ぬれてるから・・・。

『お目覚めになりましたか？主よ』

主ですと？んな紋になった覚えは無い・・・。うん。ない。しかもなんで人が喋っているみたいに聞こえるかな？前聞いたときは泣き声っぽかったけど今回はちゃんと喋っています。ちゃんと人間語を話している。

「とりあえず。救ってくれたのかな？ありがとう。」

『いえ。当然のことをしたまでです。』

寅さんが助けてくれたみたいだ。ありがたい。でも最初食べようとしていたのになんで？

「ここの掟とかわかんないから教えてくれるかな？」

『分かりました。ここは服従関係だけ分かっていればいい島です。ここは己が倒された相手がそのものの主となれるのです。そしてそ

の主を持ったものは主の願いをかなえるためなら、零体つまり肉体は一度分解され目には見えなくなり、そして魂だけとなり、いついかなる場合においても死ぬことは無い零体になれるのです。そして主人が死ぬときそのものも消えることになるのです。あとは弱肉強食の世界ですね。』

「わかった。零体のときは食料とかいるの？」

『いりません。実体つまり今なっているこの状態でも主人を持ったものも食料は要りません。』

「ふーん」

つまりこいつは僕（しもべ）か。僕となるものをよく観察してみると虎じゃなくて狼みたいだった。狼で、毛は虎みたいな黒と黄色の縞々。よくこんなんを虎だと思ったよね。まあ柄が同じだからしょうがないとしよう。うん。でも耳の形とか体形とか狼なんだよね。あ、ちなみに目の色は黒と金のオッドアイ。

きれいだね。そして全長１０メートル弱って・・・でかっ！！！

「名前をつけよう。」

『いいんですか？』

「あと、敬語は使わない。これ約束。」

使われると堅苦しくてしょうがない。この僕となるものは首を傾け不思議そうな顔でいる。いやいや。そうされても可愛いだけだよ？もはや敵じゃないし。見方だから味方フィルターをつけているのは間違いないけど・・・どうもね。身内はかわいく見えたりかっこよく見えたりするのだからしょうがない。名前は呼びやすくするため

『わかりました。・・・・じゃなくて分かった。』

「一応聞いておく。性別は？」

これわかんなかったらやばい。間違って異性用の名前付けたら居た堪れない。

『雄だ。』

「そっか。」

雄か。んじゃあ・・・。黒と金のオッドアイだから黒金と書いて黒金(くろがね)にしよう。

「あなたの名前はいまから黒金ね」

『了解した。俺は黒金。ちなみに名前を持ったものは性能が同種族のトップより3倍高くなる。』

「そっか。」

なんてチートな・・・。という言葉は何とか飲み込んだ。絶対い言ってもわかんないから。

それにしてもふわふわしている用に見えるな。毛。ああっ、つい触ってしまいたい衝動に駆られて・・・。

もふっ

『!?』

「つい。」

もふもふしていた。私は思いっきり黒金に抱きついていた。もふもふしてる〜気持ちい。

『気持ちいいか?』

「うん。気持ちいい。」

そうか。っと黒金が満足そうにごろごろと喉を鳴らす。猫みたいだね。うん。ま、気にしない気にしない！！

人型さん

『そういえば』
「ん？なに？」
黒金（くろがね）が何かを思い出したかのように、ふと喉を鳴らすのをやめた。
まあ、喋るしね、しょうがないことなんだけどもね。
『俺は主のことをどう呼べばいいのだ？そもそも、名前すら知らないのだが・・・はずかしことに。』
・・・別にはずかしことではないと思うけど。昨日？てか、さっき？あったばかりなのだからそれはしょうがないと思うしね。でも黒金はそれを恥ずかしいと思うらしく、耳を垂らせて、しゅんとしている。
うわ、やっぱ可愛い！！なんでこんなに可愛いの！？ま、さておき
「私の名前はモンキー・D・スノウ。スノウって呼んで。」
『わかった。スノウ。』
黒金が顔を輝かせ嬉しそうに言う。わたしって、そんなに名前教えない人だと思った？
『スノウ。』
「なに？」
まだなにかあったらしい。なんだろう。
『そういえば、主を持った獣は、主の初めてをもらうと人型になれ

るらしい。』
「ふーん。」
すごく真面目な顔で言うからさほど感じなかったのだが、さすがにね、でっかい獣を隣において街を歩くのは目線集めるしね。うん。てか、初めてってあげてない？
「はじめてあげてるよ？」
『どんな？』
「初めて、動物に名前を付けた。」
『そうか！！！』
考えもしなかった！見たいな顔で、しかもすごく喜んでいるし、よかった。うん。
「で、人型になってみて？」
『了解した。』
敬礼でもしそうな顔で言う黒金。そのまま（抱きつき状態）じゃなりにくいと思うから手を離してちょっと離れる。一瞬黒金が悲しそうな顔をしたが、すぐに真面目な顔に戻りなにやら呪文を唱え始める。
『我に宿りし魂よ今その力を解き放ち我に力を与えたまえ、組み換え、人型』
黒金が光りだし、どんどん小さくなっていく。そしてしばらくすると光も収まり始め、黒金の人型バージョンが現れた。
『どうだ？』

「うん・・・・すごくかっこいいよ」
『そうか？』
黒金は人型バージョンでも尻尾があったらぜったいぶんぶん振っているようなくらい喜んでいる。顔がまっかっかだけどね。人型バージョンの黒金は、髪の毛が黒色で後ろで胸辺りまで三つ編みにしてある、目は黒と金のオッドアイ。顔つきは精悍で、ただ残念なことに三歳児くらいの身長。
「で、なんでこんなに小さいの？」
『スノウとの年齢の差がだいたい二歳だからだ。』
腕を組みうんうんと首を振りながら言っている。ん？二歳差？
「てことは今、三歳なの？」
『ああ。そうだが？』
ええ！？あんな馬鹿でかい体して！？三歳ですか！！そうですか！！
私は驚きのあまり普段はあんまり顔に表情を出さないのだけれども、このときは軽く目を見開いた。
うわ。マジですか。
『で、この島に伝わる技を一通り極めてあるから護身術のためにしといた方がいいような気がするので、一通り学んでもらうぞ？』
「お願いしますね。」
このごろ海賊達がうじゃうじゃ出始めたらしいから、一応習っておいた方がいいだろう。

一覧

黒金(くろがね)が言った島に伝わる技。を一通り極めましたよ？極めたところはカオスだったので省きますが、とにかく技紹介。

壱の構え　豹

これは、豹のみたいに脚力を大幅にアップさせる効果がある。今の限度は普段の３００倍。そして、どの方角からの襲撃にも瞬時に対応できる。対応までの速度は今は０．００００００００００００００００００００００００１、はい。チートです。そこは突っ込まないでください。ちなみに実際は構えなくても、言葉を発するだけで瞬時に効果がある。

弐の構え　虎

これは、虎のように茂みに隠れたら二度と自分から出ない限り見つからなくて、攻撃力を怒りの度合いによって、今は３０~３０００倍にまでアップさせる効果がある。壱の構えとおなじで、言葉を発するだけで瞬時に効果がある。

参の構え　亀

これは、亀のように防御力を上げられることができる。そのときの精神状態によって今は３０~３００００倍にまでアップできる。どの方向の攻撃でも今は０．００００００００００００００００００００００００００００１で防げる。これも言葉だけでできる。

四の構え　狐

これは、狐のように頭脳を今は３００倍にまで上げられる。これで敵の弱点や、逆に強いところもわかる。これも言葉だけ。

伍の構え　梟（ふくろう）

これは、梟の様に夜目も効くし、物音を立てずに移動できる。視力も今は１００ｋｍ先のものまで見える用になった。これもことばだけ。

ここまでは、基礎の能力のアップね。ちなみに全部一緒にできるけど、やるとやった次の日一日中寝ないといけない。次の日まで疲れが来ない程度に一緒にやれるのは三つまで。
攻撃系に行く前に、私が食べた悪魔の実の能力は、風を起こすこと。ここ重要です。でも何の実なのかは分からないんだよね。

技

鎌鼬（かまいたち）

風を手のひらサイズの竜巻状にして敵に投げつける。これは一度に今は１０個までしか作れない。
このときの殺傷能力は、ふれたところが骨が見えるくらい。

台風（たいふう）

風速３０００ｋｍくらいの風を私から一番遠い敵までの距離を半径とした円の中で発生させる。

霧（きり）

水（少量でもよい）を空気中に放出し、それを風で分散させ、必要なところまで広がった後にそれを安定させ、そこに隠れ、暗殺する技。

爪（つめ）

風をまるで爪が伸びたように指に這わせ、鋭くし、敵を切る技。長さは最大３０ｍまで、最小１ｃｍまでできる。硬さは髪の毛でふれても壊れるものから世界一剣豪に斬ってもらっても（たぶん）大丈夫なくらいまで自由自在に変えられる。細さは、肉眼でも絶対見えない細さから１ｍまでできる。そんなに太くしないけど。そして斬られたら障害物に当たるまで風によって飛ばされる。

礫（つぶて）

風を固めて硬くして、相手に投げる技。これは、当たったところがまるで貫かれたかのようにそっくり無くなる。と言うか飛ばされる。大きさは山並から小石までの大きさにまで変わる。

拘束（こうそく）

風を縄みたいにして敵を捕らえる。

鞭（むち）

風を鞭みたいにして相手を叩く。

まあこんな感じ。そうこうしているうちに一年ほど経っていた。あ

とで爺ちゃん絶対いたぶってやる。
そんなこんなで二歳になりました。髪の毛も肩ぐらいまでまであったのが、腰辺りまで伸びました。背は１ｍぐらい。

鬼ごっこにまさかな人が

もう、私の支配下に入ってしまったこのすごい島。主となったのは黒金(くろがね)だけ、だけどどうやら黒金がこの島のトップだったらしく、そいつを従えてしまった私は黒金より強いことになったのでなぜか私がこの島のトップになりました。でも、もう島から出るんだよね。あ、ちなみに覇王色の覇気が私にあったらしく、その他も極めちゃいました。一年もあったんだもん。やらなきゃ暇だよ。で、私が一番得意なのは「見聞色の覇気」。爺ちゃんの心の声だって聞こえる。一回閉じこもりの動物とも心で会話して心を開いたりもしたし、まあ、心の懐柔も得意。先月生まれたルフィの産声も聞こえた。そんなことはさておき、今、私はこの島一番の巨木の天辺に登って伍の構え　梟　をつかって海軍船に乗ってきた爺ちゃんを観察中。一人できている・・・・とみせかけての見聞色の覇気プラスしてみてみたら、ざっと３０人くらいいた。うわ、多いな。ちなみに海兵たちの会話

「ガープさんの孫娘ってことは、当然怪力か。」
「いや、まだ二歳って聞いたぞ。」
「うわマジで！？ガープさんどんだけスパルタなんだよ。」
「これで生きてたら俺三日間食事抜くぞ」
「俺は生きているの方３万ベリーかけるぞ！！」

などなど。私生きてるし・・・。いいのか！？いいのか！？三日間食事抜きで。きっついぞ～。
もう少しで岸に着くところで私は動物達の心に向かって見聞色の覇気で声を発信した。

（不法侵入者が来るが手出しはするな。弐の構え　虎　で茂みに隠

れろ。面白いショーを見せるから）
（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（（はーい））））
））））））））））））））））））））））））））））））

島全体に生息する動物達から返事が返ってくる。皆が見聞色の覇気が使えたことに初めは少し驚いたが、なれた今はそれほどおどろかない。ま、私は私の準備をしますがね。
私は爺ちゃんが船を留めた岸に、ぼろぼろに見せた服を着てよろよろのおばあちゃんみたいに杖を手を震わせながらつかって、爺ちゃんが見える位置で派手に倒れた。これ、演技ね。ちなみに痩せ細ったように見える特殊メイクを動物達にしてもらったしね。
案の定爺ちゃんが慌てたように私を抱え、抱き上げてきた。海兵たちはどうしたらいいかわからず慌てている。私は一瞬、にやっと笑い爺ちゃんの腹に思いっきりけりを入れる。爺ちゃんはとっさのことに対応・・・してきて私を取り押さえようとしたが、

「壱の構え　豹」

で、逃げた。海兵たちの間を颯爽と抜けながら、もう一回言う。このときに風で

「私を捕まえれたら、爺ちゃんに給料上げてもらえる用に言ってあげる！！」

そういうと、各々自分の得意な拘束道具を持ち私を追いかける。でも所詮一般人の脚力。じゃないやつもいた。

「あらららら。やんちゃなお孫さんですね。ガープさん。」
「ええだろう？青雉。」

あ、青雉！？何でそんなもんがいるの！？そう、一般人の脚力じゃない奴は海軍大将の青雉ことクザンさんでした。私の脚力に追いついている。小さく「剃」と聞こえたから、海軍の六式を使っているんだろう。でも、

「私に勝てるかな！？霧っ！」

私は事前に持っている水筒から水を出し、霧を発生させた。

「おっ。やるねえ。でも、アイスＢＯＬＬ。」

冷気が飛んできて、ボール状の氷解の中に閉じ込められてしまった。

「ガープさん捕まえましたよ。」

「青雉、来てたんか。」

「てこずりましたがね。」

あ～あ。もう捕まえちゃった気になってるよ。私はまだだってのにね。見聞色の覇気を使い、ふたりの心の中に話しかける。

（残念でした。）

かろうじて動く唇で唱える。

「爪（つめ）」

今回は長さ一メートル、太さ五センチ、硬さ最大。

そして爪を出現させたことで氷塊に小さな隙間ができたので、指を動かし切り刻む。当然氷塊の欠片が海兵さんの腹とかに当たってすごくいたそう。なので、傷ついた海兵さんのところに行って治して

あげた。
うん。これも、黒金に教えてもらった技の中にある「治癒」の技なんだって。あんまり使ったこと無いからセ移行するかどうかは気分次第なんだけど。よかった。効いた。

「ま、鬼ごっこ楽しかったし、先戻ってるね！！フーシャ村！！ルフィってどんな顔なのかな！楽しみ～。じゃ！」

私は全員ぽかんとしている海兵さんたちと青雉、爺ちゃんを置いてけぼりにして、風を纏い、風の力で去っていった。

「あらら能力者。」

と、誰かがつぶやいたような気がしたけど、気のせいかな？と思ったら、後ろから誰かさん・・・って言われなくてもはっきり分かる、矛型の氷塊が飛んできたのだから。でも、今回は覇気が纏ってなかったのであえて受けてみる。痛くはない。何でって自然系（ロギア）の能力者だから。だから突き抜ける。うん。

「がはっはは、さすがわしの孫娘じゃわい！」

おじいちゃんが豪快に笑ったのを聞きながら私はフーシャ村を目指して飛ぶ前に、

「海兵さん。猛獣は傷つけないでね！私の部下だから！！あと、もう出てきていいよ動物達！黒金！零体になって来い！」
『呼んだか？スノウ。』
「うん。フーシャ村行くから。」
『イエス。マイロード』

なんやかんやで、フーシャ村に行くことにしました。あー。状況が早く変わりすぎで描写がうまいことといっていないかな？

ルフィ登場

さてさて始まりました！てか、結局爺ちゃんいたぶれなかったな。ん？今どこにいるかって？そりゃ、あと１ｋｍ位飛べばフーシャ村につくかな～ってところですよ？上空２~４ｍ位のところにいるし、後１秒くらい飛べばつくかな～ってとこです。どうせならもっと爺ちゃん驚かしたり、殴ったり、蹴ったり、罵ったり、殴って蹴って罵って殴って蹴って罵ってってしたいけど、今は私の弟のルフィを見るほうが先～。

爺ちゃんをいたぶるのは結構後でいっか～。とか思っています。え？性格悪いって？いやいや。ジャングルに一年間放置されてたんですよ？しかも、それでいて心とかで

「孫に愛されたい」

とか思ってるんですよ！？私の爺ちゃん。少しは礼儀ってもんをなあ。っと、口が滑ってしまった。まあじゃ、行きますかな。

私は風を身に纏い飛ぶ。というか空を駆ける。

一回駆けただけでついたよ。え？チート？知ってる知ってる。ん？シャンクス？いるわけ無いじゃん。え？いるかもってか？いるわけ無いと思ったいるんだよねこの世界って。いやほんとやだな。だっているんだもん。目の前に。いやいや、海でであったわけじゃないよ。ちゃんと陸で出会ったよ？陸についてすぐにであったけど。ん？もちろん逃げたよ？

「壱の構え　豹」

を使ってね。そしてルフィを気配で察知して、そこに行く・・・・・。

・・・・。うん。あの人のとこだった。ダダンさんのとこだった。
一瞬迷ったよ？開けようかどうか。うん。
弟に会うためだ。私は扉を開ける。

「ダダンさんはご在宅でしょうか？。」

できるだけ丁寧な言葉つかいでがんばる。まあ、青雉さんに比べたらこんなのひねり潰せるけどしょうがないね。だって相手は預かってくれてるのだもの。それなりに敬意は払わなくちゃ。おくからむちゃくちゃでかい女の人が出てきた。

「あたしに何かようかい？」
「私の弟をあずかっていただいているを小耳に挟みましたので、受け取りに来ました。」
「はあ？だれだい？」

あ、普通に返してくれる。結構好印象のようだ。

「ルフィです。ついでにエースも引き取ります。私のおじいちゃんがご迷惑をおかけしたと聞きましたので、御礼と謝罪の言葉を述べに来ました。」
「ちょっとまちな。」

ちょっと、ダダンさんが慌てている。こんな風にされたのは初めてなのかな？

「エースは知らんが、ルフィはほら、こいつだよ。」

そういって、ルフィの首根っこを掴んでコッチに投げてくる。よし、健康体のようだ。

「ありがとうございます。あ、これ、粗品ですが、どうぞおうけとりください。」

私は、懐からアッチでもらった果物を数個渡した。コッチでは絶対手に入らないものだから、喜んでくれるかな？そして一礼する。ダダンさんはてれたのか、しっしと手をふり、さもうっとおしそうに

「さっさそでていきな。」

といってきた。でも所詮照れ隠し。わたしは、にっこりと天使微笑（エンジェルスマイル）を作ってお礼を言う。

「重ね重ねありがとうございました。では。」

私はさっさと出て行く。でていって、数秒たったらそこら辺の茂みからエースが出てきた。

「盗み聞きはいけないよ？エース君」

「！？なぜ俺の名を。」

本当は、ずっと茂みから聞いていたのは知っていたのだがあえて放置していた。そのほうが後々好都合だしね。

ルフィ登場（後書き）

なんかどんどん腹黒になっていっているような・・・・・。

決闘

「ばれてたのか。まあいい。何で俺なんか勝手に引き取るんだよ！！」

いきなり怒鳴ってきた。いやあ。礼儀がなってないね。

というわけで、礼儀のことは後で教育（調教）してあげなきゃね。

うーん。なんでって、

「さっきも言ったけど、私のお爺ちゃんがあなたを約束で引き受けたから。イヤなら私を力でねじ伏せな。」

これは、本音。こんな中エースをほっといたら・・・ほっといても死なないのだけれど。まあそこは置いといて、普通は死ぬからな。こんなダダンさんのところで育ってたら礼儀正しく・・・・なるけども！いっぱい経験して！！そこも置いといて、普通なら死ぬと。エースの顔を見たら「こんなよわっちい奴と戦ってもしあいつが死んじまったらおれは人殺しになる」と書いてあった。ちなみに覇気は使ってないよ。

失礼な。私はそこまで弱くない。

「名前はなんだ？」

「私はモンキー・D・スノウあなたの義姉（おねえちゃん）となるもの。」

「はあ？お前何言ってんだ？」

原作から言ったらそうなるから。もちろんこの先のことすら知らないエースは思いっきり呆れ顔だ。

「ま、いやなら。あなた達・・・そうねえサボもいるし、ちょうど

いいか。というか私は逆に義妹(いもうと)となるものかもしれないし、みんなの実力も知っておきたいわ。二人で私を倒してみなさい。まあ、私も倒せないようじゃ海賊はできないわね。」

「！！」

「おまえ！どこまで知っている！！」

サボがいたのはさっき草が動いたからだし、原作はある程度呼んでいたしで結構知っていたりする。

こんなこと話したって無駄だけど。無駄だからこそ戦ってみたいのよね。

「そんなことは私を捕まえてから吐かせれば？もっとも、私はあんたらに傷つけさせられるほど腕はなまっていないし、爺ちゃんもまだこないし、一瞬で決まるからそんなにかからないと思うけど？」

「売られた喧嘩は買うのが礼儀！」

「俺は一度目を向けた相手は絶対倒す！」

私にかわいらしい（私にとっては）敵意を向けてきた。いやあ、おっかないおっかない。

「その認識間違いだから今直しておいた方がいいよ。」

私はルフィを抱えたまま後ろから不意打ちもどきをしてきたエースたちはさっきとか気配が駄々漏れだったのですぐ分かったので、軽く右にそれ、かわす。

エースたちは、地面に着地し、すぐ私に向かって鉄管を振り落としてくる。それを左にかわして、ついでに鉄管を持っている手に足蹴りをして落とさせる。本とはここで手等で気絶させるのだけど、なんとなくやめておいた。エースたちは再び鉄管を構えて飛び掛ってくる。いつも真正面から来るのだが今度は二人それぞれ挟み撃ちみ

たいに私に向かって軽くジャンプしそれを振り下ろしてきた。私は軽く跳びサボの鉄管の上に乗り軽く駆けて、サボの背後に回り首に手刀を入れ気絶させる。サボはそのままどさりとエースの方へ倒れこみ、エースが受け止める。それを見たエースの目に軽く覇気が加わった。覇王色の覇気が。
そして、叫んだ。

「サボおおおおおおおおお！！！」

そして、エース自身も倒れこむ。ルフィも気を失っている。

「ルフィ！？ったく。無差別攻撃なんかして・・・。しょうがないんだから。黒金。こいつ等運んで。ルフィは私が抱えるから。泉の近くにそっとね。人型で。」
『わかった。泉はダダンとかいうのに行くときに見つけた泉だな？』
「うん。」

そう。私たちはダダンさんの所に行くときに見つけたのだ。泉を。
私はルフィを抱え。黒金は

『我らに宿りし魂よ今その力を解き放ち我に力を与えたまえ、組み換え、人型。』

と唱え、一瞬で人型になった。いまはどんな姿か詳しく説明する暇が無いのでとにかく今は泉に急ぐ。

エース　悩む

スノウ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　エース

あいつ・・・・確か　モンキー・Ｄ・スノウ　とかいったかアイツに俺は一瞬で負けた。やっぱりまだ鍛え方がたりないんだ。こんなんじゃ海賊にはなれないと、言っていた。
悔しい。
俺は静かに涙を流した。
ふと、誰かが優しく俺の頭を優しくなでてくれる人がいた。

「大丈夫。大丈夫。大丈夫だよ。泣かないで。」

俺は、その人を見るべく目を開けた。

「おわあっ」

スノウだった。俺はこんな奴に心配されていたのか？

よく見たら俺より年上みたいな男もいる。黒色の髪は後ろで一つにくくっている。でも腹ぐらいのところまであるし、目もすごい魅力的な金と、黒だ。顔つきはそのものが芸術ぐらいのところまできれい過ぎる。背も高く、俺の頭一つ分ぐらい飛び出ている。スノウもスノウで髪の毛は腰まである癖の無い真っ黒な髪の毛で、目は優しげな黒色をしている。顔つきは穏やかで、どこか姉ちゃんを思わせる雰囲気をかもし出している。こちらも負けず劣らずきれいだ。

「泣いていたから・・・・。あと、手加減したつもりだったけど気絶させてごめんなさい。悪気は無かったの。」

はあ？こっちに謝っている！？真ん中の方はちょっとアレだったが、でも、本当はいい奴なのかもしれない。俺はそのままぽかんとスノウを見つめる。

「まあ、とにかく。またどこかで会いましょう。ダダンさんのほうへは勝手に帰ってもいいと思うわ。」

「あ、おまえ！」

スノウはくるりと俺に背を向け、さろうとした。俺は、そのまま呼び止めていた。

「なに？」

スノウが振り返る。おれは、なぜかドキッとした。スノウは穏やかな目をしている。

「お・・・・・お前に今度会うにはどうしたらいいんだ。」

自分で言っていながら、なんとも恥ずかしい質問だ。俺はすこし顔

が赤くなる。

「そうね、五年後。ここで持ってるわ。」

「わかった。」

なぜ五年なのかは分からないがとにかく、次は、絶対勝つ！

エース　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　スノウ

五年後・・・・多分ルフィがあなたの元へ行くから。そういう意味を込めて私はいった。そのまま、エース太刀に背を向け、一気に駆ける。もちろんルフィはちゃんと抱っこしてるよ？爺ちゃん来たかな？

エース　悩む（後書き）

表面上はきれいなスノウちゃんでした！

挨拶まわり

ここの世界はそうであってもしく無いときにあり、ほしいときになってくれないものである。それに巻き込まれている。主に私が！なぜてしょうか。とてつもなく悪い予感がするのです。爺ちゃんとシャンクス接触とか爺ちゃんとシャンクス接近とか爺ちゃん&青雉がシャンクスと接触とかあ。そうなったら終わるね。うん。ＯＮＥＰＩＣＥが。う～んまず爺ちゃん。いたらいいな。浜辺とかに。・・・。こういうときの予感ってたいてい当たるのよ。だっているもん。すぐ近くに。

「遅かったね。」

「！！」

「しかも一人ってまあ、ありがたいんだけど。海兵さんたちはもう帰ってもらったようだし、ねえ。」

「わーっはっはっはっは。さすがわしの孫娘じゃわい。よう見抜いておる。で、なぜるルフィを抱いておるのじゃ？どこで見つけた。」

じいちゃん・・・。普通はここで悪魔の実を食べたことをきかないのか？きずいてはいるだろう。でもな。とかいろいろ思うけれども正直に答えておきますか。

「ダダンさんのところへ行ってそんでもって自分で育てるために取り返してきました。」

「ちょっとルフィ貸せ。」

じいちゃんが手を伸ばしてくる。

そして、つかみにかかる。私はまあよけても良かったがとりあえず素直に渡しておいた。

「ダダ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ン！！。」

じいちゃんは雄たけび？をあげながらダダンさんのほうへ走っていった。
が、私にはどうでもいいことで、ご近所さんに挨拶に行った。
まずは、マキノさん。次に村長さん・・・・・シャンクスさんは、も、行っておくかな。
マキノさんがやっている酒場にいく。
なにやらがやがやとうるさい。
私は静かにドア？みたいなものを押し、お店に入る。

「マキノさんはいますか？」

私はしっかりと口にした。が、海賊・・・シャンクスたちの声で聞こえない。
んじゃ、私はマキノさんのところまで歩いていく。
そこまでの最中に声を掛けられたりもしたが聞こえない振りをする。
酒樽を持ったきれいなお姉さん、マキノさんに話しかける。

「マキノさん。お久しぶりです。」
「あら。こんにちは」
「私はガープおじいちゃんの孫娘。モンキー・D・スノウと申します。一年ぶりですね。その一年になぜ、海賊たちがここを拠点にしているのでしょうか。別にいいのですがさすがにちょっと海賊さんたちに話しかけずらいです。後海兵さんたちが来たときにどう言い訳したらいいのかわからないので逃げるか気絶させるかしか選択出来なくなってしまいます。ま、そんな話はおいていて、とにかく無事に帰ることが出来ましたので挨拶に来ました。」

マキノさんは困ったように笑い。そしてその後思いっきり笑った。
「あははは。相変わらず面白いわね。ちょっと復帰ついでに料理を食べて行ってね。」
そういって奥に行こうとする。私は袖を引っ張ってそれを止める。
「わたし・・・この石しか持っていないけどこれでいい？代金。」
わたしはポケットから私の支配下においてしまった島にしかなさそうな綺麗な緑色の石を渡す。
なぜか渡したときに後ろにいた海賊たちが
「「「「「「「えええええええっ！！！！！！」」」」」」
と、みんな目を飛び出さんかのように見開き、あごをはずしかけている。
そのうちの一人が、こういった。
「そ、それは、だれも生きて帰れなかったというあの「悪魔島（デビル・パーク）」しかないうちの高級品、貴族ものどから手が出るほどほしいのに誰も手に入れていないという、「緑の雫」じゃねえか。」
と。そしてマキノさんがその石をかえしてくれた。
「そんなに高価なものならスノウちゃんが持っていて。」
「あの、マキノさんのために私、ネックレスつくってきたの。これは、受け取ってほしい。だめ？」
そういって、こんどはウサギちゃん型の青い石を金らしきもので加

工してあるネックレスを渡す。最後に上目使い&うるうる目で、首を傾げてみた。
マキノさんはあわてたようにそれを受け取り、
「う、うん。ありがとう。代金は要らないから食べてってね。」
「うん！ありがとう。」

わたしは出来るだけ、満面の笑みで答えた。
そして、カウンターで食べ物にがっつくシャンクスのところへ行く。

「こんにちは。シャンクスさん。」
「よお。こんにちは。スノウちゃん。」

案外普通に返してきた。

「あんた、何者なんだ？」

いきなりきました。ここは、ね。

「二歳のこどもです。」
「そうは見えねえな。」

やば・・・・。何かきずかれた。

挨拶まわり（後書き）

なぜかどんどん悪役キャラになっていくスノウちゃん。

さいご

ここは、あえて何も言わないほうがいいのだ。頭のどこかでそう考えた。

「ま、ただの子供だろうけどな。」

よし、きずいていなかった。
わたしはこれ以上かかわったらなにか大事なものを暴かれそうだったので、クルリを身を翻し、掛けていく。もちろん

「壱の構え　豹。」

でね。ま、そんな感じであいさつ回りが無事終了。え？村長さん？どこに家があるか探すの面倒だったので、スルー。あ、ご馳走も食べ忘れた。いいや、あとで果物とどけよう。

まそんなこんなでｏｎｅ　ｐｉｃｅの主人公が登場できる年齢になりました。が、なぜでしょう。力の暴走により私の体が吹っ飛んでしまいました。え？そんなん私にもわからんよ？確かきっかけはとっても単純で、

この世にいらない存在

だったから。それで、じぶんがこの世にいていいのかわかんなくなって、い、いらない存在らしく散ってやろうじゃないか。というわけで、暴走しました。いらない存在かどうかは、自分で悟りました。よくよく考えてたら黒金だって私が縛り付けてたんだし、ルフィにとっても原作にとっても邪魔だから。

う～ん。でも黒金だけは最後の最後まで死ぬなって叫んでたな。結局私の後をおって帰らぬ人になってしまったんですけど。私も。で、

「お前らは、わしのせいで死んでしまった。わしの責任じゃ。おぬしらに、今度は、必要な存在として違う物語に転生する。もちろんまだない物語じゃ。」

とか何とかいって神様的なものが私と黒金の胴体とかかき集めてどっかにひとまとめにして放り込んだのですよ。

こんな結末でいいかって？

いいの。

結局どこでも要らなかった私が、今度は必要な存在になれるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8912r/

どうやら転生してしまったようです。

2011年5月6日17時54分発行